

看護教育における 「生活経験」「生活体験」に関する解釈の一考察

黒白恵子 杉山洋介 小林紀明 堤千鶴子
(Keiko KUROUSU Yosuke SUGIYAMA Noriaki KOBAYASHI Chizuko TSUTSUMI)

【要約】

本研究は、看護基礎教育現場や臨床、論文など、あらゆる看護に関係する場面で日常的に使用されている用語である「生活体験」「生活経験」の定義についてレビューし、考察を行ったものである。方法は、医学中央雑誌およびJSTPlusにおいて、この2語を検索し先行研究における用語の定義、内容を抽出した。その結果、研究者によってその定義は異なり明確に区別されていないことが明らかになった。“生活”とは生存する上での活動のすべてを指し、“経験”とは体験を意識化、日常化などにより成熟したものと言え、看護学では主に基本的欲求に関する活動を指すことが多い用語である。また「生活体験」は生活上のすべての体験である。「生活体験」が成熟することにより「生活経験」となると考えられた。教育や社会の変化により学生の持つ生活体験・生活経験も変化しているためそれらを十分に理解したうえで教育の方法を選択していく必要があることが本研究において示唆された。

キーワード：生活経験、生活体験、看護、看護教育、看護学生

1. はじめに

我が国は、1950年代に高度成長期をむかえたのを機に急速な少子高齢化社会への変容と同時に核家族化が進んだ。また、社会は高い生産性を持つ人材に価値を見出し日常生活上の様々なプロセスが機械化や効率化がなされてきた。そのような社会で育ってきた現代の大学生は、日常生活における人との関わりをはじめそれに伴う活動の体験や経験が少ないと言われている。特に、人の日常生活と深く関わる看護という学問を目指す看護学生においては問題視されることが多く、それらは「『生活経験』が少ない。」あるいは「『生活体験』が少ない。」といったいわれ方をする。「生活経験」「生活体験」といった用語は、日常の看護基礎教育現場や臨床、論文といった看護学のあらゆる場面でたびたび遭遇するが、その解釈は、各個人によって様々であり、明らかな定義はされていない。そこで本研究は、看護基礎教育に関連する文献の中から「生活経験」「生活体験」という用語が指す体験・経験や含まれる意味

を明らかにし、「生活経験」「生活体験」の定義を考察し、看護基礎教育実践の一助にすることを目的とする。

2. 研究方法

医学中央雑誌Ver.4、JSTPlusにて「生活経験」および「生活体験」を検索した。医学中央雑誌は1983年～2007年（全年）、JSTPlusは1981年～2007年（全年）とした。検索された文献の内容から「生活体験」「生活経験」の指す体験・経験および用語の解釈を抽出した。

3. 結果

1) 生活の定義

広辞苑¹⁾で生活とは「生存して活動すること、生きながらえること」であり、広辞林²⁾では「生きて活動すること、働くこと、世の中で暮らしていくこと」と定義されている。さらに、看護学大辞典³⁾では「生活とは、生命の維持存続とそれを高めていく営みであり、物の清算と消費をめぐっての活動であるといえ

る。日本での日常用語としては、普通暮らしや生計といった意味で用いられることが多く、この生活とほぼ対応するものとされている life という言葉は、この生計や暮らしということのほか、生命や存続、さらには一生、人生、生涯といった意味が合わせ含まれていると指摘されている」としている。(表1)

2) 体験と経験の定義

広辞苑によると、体験とは「自分が身をもって経験すること、またその経験」、経験は「人間が外界との相互作用の過程を意識化し自分のものとする」「感覚・知覚から始まって道徳的行為や知的活動までを含む体験の自覚されたもの」と説明されている。(表1)

3) 生活体験、生活経験の定義

広辞苑や看護学大辞典等の各種辞典には、生活体験および生活経験としての用語定義はされておらず、「生活」「体験」「経験」という独立した項目として定義づけられているにとどまっていた。また、英語訳においては「体験」と「経験」は experience という1つの単語に意味が含まれており、life experience として生活体験、生活経験は表記されている。(表1)

表1 生活、体験、経験、生活体験、生活経験の用語定義

生活	生存して活動すること、生きながらえること(広辞苑、1998) 生命の維持存続とそれを高めていく営みであり、物の清算と消費をめぐっての活動(看護学大辞典、1998)
体験	自分が身をもって経験すること、またその経験(広辞苑、1998)
経験	人間が外界との相互作用の過程を意識化し自分のものとする。感覚・知覚から始まって道徳的行為や知的活動までを含む体験の自覚されたもの(広辞苑、1998)
生活体験 生活経験	用語定義はされていない(広辞苑、看護学大辞典ほか)
英訳	「体験」と「経験」は experience という1つの単語に意味が含まれており、life experience として生活体験、生活経験は表記されている

4) 看護における“生活経験”の先行研究

先行研究の国内文献に関して、医学中央雑誌で“生活経験”と入力し検索したところ48件であり、“看護”の絞り込みでは29件であった。この内テーマに生活経験が含まれている内容は16件であり会議録6件、

原著論文10件であった。

また、同様にJSTPlusでは、“生活経験”の検索で90件であり、“看護”での絞り込みでは11件であった。この内テーマに生活経験が含まれている内容は4件であった。

各研究の生活経験の捉え方は、田島^{4,5)}は、看護は人々が日常の家庭生活で習慣的に行ってきたことを、専門的知識・技術・態度をもって健康面から維持・発展させることであり、看護基礎教育において学習者の入学前における学習・生活経験を生かした教育を検討する必要があるとし、全国の4年生看護大学の入学生を対象にした実態調査を行っている。生活経験項目は看護場面と密接な関連のある、「食事」「衣類」「清潔」「余暇」「対人関係」「学習」を調査しており、日常生活の過程で習慣的に行っている行動においては大半の学生が経験を持ち、望ましい習慣に基づいて行っているとしている。大谷⁶⁾は、看護者のもつ老人イメージは看護に取り組む姿勢を形成する源となり、看護の質・内容に影響を及ぼすと考えられ、看護学生の老人イメージを明らかにすることの重要性を示しており、看護短大生と一般大学の女子学生を対象に老人イメージと生活経験の関連を調査している。生活経験項目は、「祖父母との同居経験」「祖父母との会話頻度と会話内容」「老人の世話の経験」「近所の老人との付き合い」「印象に残った老人」を項目選定し調査している。老人イメージと生活経験の関連では、イメージの形成にはテレビやメディアの情報より祖父母との会話、家族を軸とした老人との印象が残るような生活経験が重要であるとしている。江田⁷⁾は、看護教育においては人間の日常生活行動に注目し、それに関連する援助の在り方を学習するためにも、学生が日常生活においてどのような経験や習慣を持ち、どれくらい自立しているのか知ることが必要であるとし、看護学生の入学時以前の生活経験、生活習慣、対人関係、学習の仕方、学習への関心を調査している。生活経験項目は日常生活行動面の経験を中心に構成しており、「食事に関する経験」、「衣類に関する経験」、「入浴・洗髪に関する経験」、「掃除に関する経験」、「余暇に関する経験」を調査内容としている。日常に家事として行うような日常生活行動については、経験の頻度が高く、経験している内容の範囲も幅広いことを明らかにしている。

瀧澤⁸⁾は、精神看護学において新聞記事を教材として学生の生活経験から精神の健康を考える授業を展開

しており、授業内容と学生の生活経験、新聞記事の関心度がそれぞれ連動して効果的に影響しているとしている。(表2)

表2 看護における先行研究での生活経験の用語定義・解釈

田島 (1994) (1996)	用語定義はされていない。 看護基礎教育において学習者の入学前における学習・生活経験を生かした教育を検討する必要があるとしている。
大谷 (1995)	用語定義はされていない。 看護学生の老人イメージの形成には老人との印象が残るような生活経験が重要であるとしている。
江田 (1995)	用語定義はされていない。 看護教育において学生の入学前の日常生活における生活経験や生活習慣を把握する必要性があるとしている。
瀧澤 (2000)	用語定義はされていない。 精神看護学の授業に新聞記事を活用することにより授業内容と学生の生活経験がそれぞれ影響し効果的な影響を与えているとしている。

5) 看護における“生活体験”の先行研究

“生活体験”について、医学中央雑誌で検索したところ130件であり、“看護”の絞り込みでは97件であった。この内テーマに生活体験が含まれている内容は43件であり、会議録21件、解説1件、一般1件、原著論文20件であった。また、同様にJSTPlusでは、“生活体験”の検索で183件であり、“看護”の絞り込みでは23件であった。この内テーマに生活体験が含まれている内容は5件であった。

各研究の生活経験の捉え方は、齋鹿⁹⁾は、看護の教育内容とその方法の精選のための基礎資料として、看護学生の入学時の老人観と老人との生活体験の分析を試みている。老人との生活体験は「祖父母との同居の有無・同居時の生活様式・家族の中での祖父母の役割」「祖父母との関わりの程度・内容」「学生が人間形成上で祖父母から影響を受けたと思うもの」「社会の中での老人との関わりの有無・程度・内容」を調査しており、老人観への影響は学生のこれまでの生活体験が影響すること示唆し、看護教育の場において老人観を豊かにする取り組みが必要であるとしている。野崎¹⁰⁾は、看護大学生の社会的スキルと自己効力感や生活体験との関連の調査を行い、生活体験の項目において人との関わりでの積極的および消極的経験を自由記載させ項目抽出しており、人と積極的に関わる経験と自信

をなくす経験を両方経験している学生は社会的スキルが高いことを明らかにしている。佐藤¹¹⁾は、基礎看護技術が看護短大生の生活体験や生活習慣に及ぼす影響を追跡調査している。本研究では、「生活体験は日常生活において自分自身が身をもって経験したことであり、今回は主に生活関連動作の経験とする」と用語定義している。生活体験項目は「手作りの料理」「食事の片付け」「自室の掃除」「私物の洗濯」「裁縫」「シーツ交換」を調査しており、学生の生活体験が未熟であることや基礎看護技術の講義が自らの生活体験や生活習慣を考える動機づけになるとしている。松下¹²⁾は、基礎技術の療養上の世話における看護技術は、自己の日常生活体験を基盤として養われるため、多様な背景をもつ学生に基礎看護技術の効果的な教育を行うためには、学生の生活体験状況を把握することが役にたつとして実態調査を行っている。生活体験項目は、家事能力を基礎とする「食事の片付け」「夕食作り」「弁当作り」「ほつれ直し」「ボタンつけ」「アイロンかけ」「ゴミ出し」「蒲団干し」「手洗い洗濯」「洗濯機での洗濯」「トイレ掃除」「風呂掃除」「雑巾がけ」「掃除機での掃除」の日常生活スキルで構成されており、看護短期大学生の日常生活体験不足を明らかにしている。林¹³⁾は、看護学生が既に身につけてきた生活体験の「爪切り」を他者に実施した結果から学生達の学びの実態を明らかにしている。長家¹⁴⁾は、看護学生の生活体験とコミュニケーションに関する研究において、「生活体験は日常生活の中で体験するすべてのこと」とであると用語定義している。本研究では、生活体験項目として、看護学生のコミュニケーション能力を促進すると思われる「ボランティア」「地域での交流」「こども会」「異年齢交流」「クラブ活動」「お稽古ごと」の6項目との関連を調査しており、学生のコミュニケーション能力を把握する目安として、学生の生活体験の度合いが有効であるとしている。萩原¹⁵⁾は、看護学生の生活体験は看護独自の機能である日常生活の援助技術の質に関係してくる必要な体験であるとし、学生の生活体験の実態調査を行っている。質問項目は生活に密着した項目数が多いヘンダーソンの基本的ニード項目を参考に「呼吸」「飲食」「排泄」「移動・姿勢」「睡眠と休息」「衣類の洗濯と着脱」「体温の調整」「清潔・身だしなみ」「環境上の危険因子をさける」「コミュニケーション」「信仰」「仕事」「遊び・レクリエーション」「健康に必要な生活行動の学習・発見・好奇心の満足」「性」の

15項目の日常生活体験を中心に、自分自身の経験と他者への援助の経験内容で構成している。看護教育機関では学生の生活体験の減少を認識し、個別性を踏まえた教育・指導が必要であるとしている。川崎^{16, 17)}は小学生及び気管支喘息をもつ子供の自然体験と生活体験の実態調査を行っている。本研究では「生活体験は日常生活の基本となる体験であり、基本的な生活習慣、自主性、道徳心、探究心などに関することがらを含む」と用語定義をしている。生活体験に関する具体的項目として、「朝、食事をとる」「友達や先生や家族の人と話をする」「朝、顔を洗ったり歯を磨く」「動物や植物を大切にする」「あいさつをする」「人にやさしくする」「約束を守る」「自分の意見をはっきり言う」「わからないことを本で調べる」「自分のものは自分で片付ける」「自分で計画を立てて勉強する」「一度決めたら最後まで頑張る」「朝、起こされなくて自分で起きる」「すすんで家の手伝いをする」「文芸作品などの本をたくさん読む」の15項目を調査しており、自然体験の豊富な小学生及び喘息児は、生活体験の頻度が高いことを明らかにしている。渡邊¹⁸⁾は、更年期症状と生活体験上の因子の関連を調査し、属性要因、内分泌要因、心理的要因、生活習慣の生活体験上の因子から8因子を抽出している。伊丹¹⁹⁾は、看護学生が生活者として援助の必要性に気づく、感性を高める教育支援の重要性を指摘し、学生の生活体験・対人関係の実態調査及び他者意識による気づきの調査を行っている。生活体験項目は入学前までの「料理」「食事の片付け」「部屋の掃除」「トイレ掃除」「衣類の洗濯」「シーツの洗濯・交換」「買い物」「動物や植物の世話」を調査しており、内的他者意識の高いものは、命や人に関わるような生活体験を多く行ってきたことを認めている。佐藤²⁰⁾は、後期高齢者にインタビュー調査を行い、高齢者の生活体験が及ぼす自己の身体へのいたわりを明らかにしている。川田²¹⁾は看護教員が看護学生の生活体験不足に起因する臨地実習中の問題行動・場面を分析し、その原因と対策を検討しており、本研究では「生活体験は、掃除や炊事、洗濯、更衣などの生活に関連した動作や、自治会の活動など地域社会での生活活動に関連した体験」と用語定義している。各教員の分析から看護学生の生活体験の乏しさは、生活技術の不足だけのみならず他者への関心や思いやりの不足といった深刻な問題をもたらしていることを示唆している。岩瀬²²⁾は、外来通院中にある思春期小児がん患者の自己効力感の特

徴と、それを形成・変化させる生活体験を調査している。自己効力感を形成・変化させる生活体験は、「学校生活」「入院生活」「普段の生活」ごとに自由記載をさせ項目抽出しており、自己効力感との関連として、入

表3 看護における先行研究での生活体験の用語定義・解釈

齋鹿 (1988)	用語定義はされていない。 老人観への影響は学生のこれまでの生活体験が影響するため、看護教育の場において老人観を豊かにする取り組みが必要であるとしている。
野崎 (2002)	用語定義はされていない。 人と積極的に関わる経験と自信をなくす経験を両方経験している学生は社会的スキルが高いことを明らかにしている。
佐藤 (2002)	生活体験は日常生活において自分自身が身をもって経験したことであり、本研究では主に生活関連動作の経験とすると用語定義している。
松下 (2002)	用語定義はされていない。 学生に基礎看護技術の効果的な教育を行うためには、学生の生活体験状況を把握することが役に立つとしている。
林 (2003)	用語定義はされていない。 看護学生が既に身につけてきた生活体験の「爪切り」を他者に実施した結果から学生たちの学びの実態を明らかにしている。
長家 (2003)	生活体験は日常生活の中で体験するすべてのことであると用語定義している。
萩原 (2004)	用語定義はされていない。 看護学生の生活体験は日常生活の援助技術の質に関係してくる必要な体験であるとしている。
川崎 (2004) (2006)	生活体験とは日常生活の基本となる体験であり、基本的な生活習慣、自主性、道徳心、探究心などに関連することがらを含むと用語定義している。
渡邊 (2005)	用語定義はされていない。 更年期症状に関連する生活体験上の因子を明らかにしている。
伊丹 (2005)	用語定義はされていない。 看護学生で内的他者意識の高いものは、命や人に関わるような生活体験を多く行ってきているとしている。
佐藤 (2006)	用語定義はされていない。 後期高齢者の生活体験が及ぼす自己の身体へのいたわりを明らかにしている。
川田 (2006)	生活体験とは掃除や炊事、洗濯、更衣などの生活に関連した動作や、自治会の活動など地域社会での生活活動に関連した体験であると用語定義している。
岩瀬 (2007)	用語定義はされていない。 思春期小児がん患者の自己効力感を形成・変化させるためには、入院中からの日常性が実感できる体験への配慮等が必要としている。

院中からの日常性が実感できる体験への援助の必要性等を示唆している。(表3)

4. 考察

1) 「生活体験」「生活経験」の解釈

検索した文献のうち、「生活体験」という用語の解釈を明確にしていたものは4編であり、その内容は「日常生活において自分自身が身をもって経験したこと」と幅広い意味合いを持たせる定義から、「掃除や炊事、洗濯、更衣など生活に関連した動作や、自治会の活動など地域社会での生活活動に関連した体験」と具体的な定義まで研究者によってその体験の定義は様々である(表3)。一方、「生活経験」では、その内容を明確に定義しているものは無いが幅広い経験の中から頻度が高いと思われる活動を生活経験として選定している。これらより、これまで使われてきた「生活体験」「生活経験」2語の質的な区別はされていない現状にあることが示唆された。それには、「生活経験」「生活体験」という言葉を定義している辞典はなく慣習として使用されてきた造語であったことが一つの要因であると考えられる。この2語を構成する単語、「生活」「体験」「経験」は明確に示されており、広辞苑で「生活」とは、「生存して活動すること、生きながらえること」、広辞林では「生きて活動すること、働くこと、世の中で暮らしていくこと」と定義されている。さらに、看護学大辞典では「生活とは、生命の維持存続とそれを高めていく営みであり、物の清算と消費をめぐるの活動であるといえる。日本での日常用語としては、普通暮らしや生計といった意味で用いられることが多く、この生活とほぼ対応するものとされているlifeという言葉は、この生計や暮らしということのほか、生命や存続、さらには一生、人生、生涯といった意味が合わせ含まれていると指摘されている」としている。ヘンダーソンは、看護の定義をするにあたり独自の機能を求めた²³⁾。そして、個々の生活が満たされる条件として基本的欲求を挙げ、さらに「看護の基本となるもの」として14の構成要素を提示した。これは、今日の看護展開に大きな影響をあたえており看護学を考察する上で中心的な理論となっており、各種テキストの看護技術の構成もこの理論に基づいていることが多い。先行研究における生活体験、生活経験として挙げられている具体的活動は基本的欲求に基づく活動を挙げていることが多く、それはこの理論の影響を受け

ているためと考えられる。

さらに「体験」「経験」という用語の定義は、広辞苑には「自分が身をもって経験すること、またその経験」、「経験」は「人間が外界との相互作用の過程を意識化し自分のものとする事」「感覚・知覚から始まって道徳的行為や知的活動までを含む体験の自覚されたもの」としている。

つまり、「生活経験」や「生活体験」という用語は、この用語を多用する看護学、家政学に限られるものでも日常生活上の特別な体験・経験を指す用語でもなく、人間が生活する上でのあらゆる活動の体験、経験を指す用語であるといえる。さらに「体験」「経験」の関係性を考察すると、英語では、「experience」に「体験」「経験」の意を包括しておりその文章からニュアンスを読み取る一方、日本語においてはこの二つの語意は明確に区別されており、「体験」が日常化や意識化など様々な要因によって知的活動を含んだものが「経験」となると考えられる。つまり、生活上の体験「生活体験」を繰り返し相互作用の過程を意識化、知的活動を伴い成熟したものが「生活経験」である。この成熟の過程には、生活体験を得るまでの意識・過程が大きく影響する。その生活体験に対し興味を持っているあるいは動機が強ければ、つまり能動的な生活体験であることが経験へ成熟させるためのひとつの条件であるといえ、能動的であればあるほど成熟する時間は短く容易である。受動的な生活体験であれば反復するにも知識を併せ持つことにも時間や労力がかかるであろう。

2) 大学生と生活体験・生活経験

現在の大学生が受けてきた小学校から高等学校までの教育の特徴として、ゆとり教育がある。これは、学校完全5日制の下、ゆとりの中で特色ある教育を展開し生きる力を育成することを目的とし、1989年の学習指導要領の改訂において生活科が新設された。その教科目標は「具体的な活動や体験を通して自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ自立への基礎を養う。」²⁴⁾としている。つまり、この学習指導要領の改訂により、それまで行われていた知識や技能を共通的に身につけさせることを重視してきた教育から、自ら意欲的に学び、思考力、判断力、表現

力を身につけることを重視した教育に変更され、その地域ごとに様々な活動、職業など、そのときだけでなく将来の日常生活をも想定し関連する体験を多く取り入れた教育が行われてきている。急速な少子高齢化や核家族化、インターネットや携帯電話など通信機器の発達により他者との関わりが少なくなり問題視されている一方で、ゆとり教育の中ではそれ以前の大学生よりはるかにたくさんの社会的な生活上の体験をしているはずなのである。それにもかかわらず、生活経験が少ないことが問題となる原因として、その体験が受動的なものであり経験に成熟していないという学生側のもつ問題、体験の反復や知的活動など成熟するための援助が十分に与えられていない教育上の問題を含む可能性が考えられる。また、大学生の経てきた体験と教員の想定する体験にずれが生じている、またそれに起因する価値観の多様化に教員が対応できていないという教員の問題ということも十分に考えることができる。

3) 看護基礎教育と生活体験・生活経験

看護基礎教育では、過程の中で学ぶあらゆる内容をただ単なる生活体験で終わらせず、生活経験として成熟した形で身につけ臨床に出て行くことが期待される。そのためには、学生にいかに関心・生活自体に興味を持たせられるか、いかに知識を統合させることができるかが重要となってくる。

また、大学生・教員間での生活体験、生活経験さらには価値観への十分な理解、共有が必要である。高度経済成長期以降に育った人たちは、“戦争のない、安定した生活という昔の人の夢がかなった今日に育ってきた人”つまり現代の大学生年齢の人たちは、この誰もが持てるようになった安定に閉塞感を持つようになったといわれる。²⁵⁾ その結果あらゆる方面に非日常や変化を求めるようになり、戦争による窮乏生活を強いられた世代の人にはその変化での理解が難しいと考えられる。しかし、それが現在の社会であり生活であり、その中にもたくさんの体験や経験を含んでいるのは事実である。したがって「生活体験」を「生活経験」に成熟させるために、これまでの無意識下にある生活体験を意識化しその生活体験を対象の生活と関連させ看護を展開するような思考のプロセスを援助する必要がある。

5. 結論

日常的に使用されている「生活体験」「生活経験」という用語は、言葉の定義を厳密に考慮するとその意味は異なるが、実質的に明確な使い分けをされていない現状が明らかとなった。生活体験は、それを反復すること、意識化し知識を結びつけることなどにより成熟したものが生活経験であると考えられる。人々の生活と関わりの深い看護学の分野において、特に看護基礎教育においては学生の持つ生活体験を生活経験へと教育的に成熟させ、さらにそれを看護の対象者への援助に結び付けられるような展開が必要であると考えられた。

【引用文献】

- 1) 広辞苑 (第5版), 岩波書店 (1999)
- 2) 広辞林 (第6版), 三省堂 (1983)
- 3) 看護学大辞典 (第5版), メヂカルフレンド社 (2002)
- 4) 田島桂子他: 看護大学入学時における学生の学習レディネスに関する事前評価—看護行動と関連する生活経験と学習をめぐる内容を中心に—, 日本看護学教育学会誌, 4 (1), 19-33 (1994)
- 5) 田島桂子他: 看護実践に対応した看護基礎教育 学習者の学習・生活経験を生かした教育の可能性, 日本看護学教育学会誌, 6 (3), 17-27 (1996)
- 6) 大谷英子他: 老人イメージと形成要因に関する調査研究1 大学生の老人イメージと生活経験の関連, 日本看護研究学会雑誌, 18 (4), 25-38 (1995)
- 7) 江田純子他: 1994年度本学入学生の入学時における生活経験・学習に関する調査, 聖隷クリスティー看護大学紀要, 3, 93-108 (1995)
- 8) 瀧澤直子: 生活経験から「精神の健康」を考える授業—新聞記事を教材にして—, 東海大学短期大学紀要, 34, 17-21 (2000)
- 9) 齊鹿ミヤコ: 看護学生の入学時までの生活体験と老人観との関係, 東海大学短期大学紀要, 22, 155-164 (1988)
- 10) 野崎智恵子他: 1年間の経過からみた看護大学生の社会的スキルと自己効力感, 生活体験の関連, 東北大医短部紀要, 11 (2), 237-243 (2002)
- 11) 佐藤真澄他: 看護短大生における生活体験および生活習慣の変化—「基礎看護技術」の及ぼす影響—, 日本赤十字愛知短期大学紀要, 13, 1-10 (2002)
- 12) 松下由美子他: 看護短期大学生の生活体験の実態—単身生活者と同居生活者の比較検討から—, 日本看護学会論文集 看護教育, 33, 12-14 (2002)
- 13) 林真理子: 学生の生活体験を活かした看護技術の学び「瓜切り」体験を通して, 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報, 12, 11-17 (2003)
- 14) 長家智子: 看護学生のコミュニケーションに関する研究 生活体験と集団行動体験とコミュニケーション能力との関係に焦点を当てて, 九州大学医学部保健学科紀

- 要, 1, 71-81 (2003)
- 15) 萩原美紀他: 臨地実習前の生活体験に関する実態調査, 三重看護学誌, 6, 91-96 (2004)
- 16) 川崎友絵: 小学生の「自然体験」と「生活体験」に関する実態調査, 小児保健研究, 63 (1), 23-30 (2004)
- 17) 川崎友絵: 気管支喘息をもつ子どもの「自然体験」と「生活体験」に関する実態調査, 小児保健研究, 65 (1), 18-25 (2006)
- 18) 渡邊竹美他: 更年期女性の生活体験と愁訴との関連, 秋田大学医学部保健学科紀要, 13 (2), 101-107 (2005)
- 19) 伊丹君和他: 看護学生における生活体験・対人関係の実態と他者意識との関連, 日本看護学会論文集 看護教育, 36, 209-211 (2005)
- 20) 佐藤可奈他: 後期高齢者の生活体験が及ぼす自己の身体へのいたわり, 日本未病システム学会雑誌, 12 (1), 105-107 (2006)
- 21) 川田智美他: 看護教員が学生の生活体験の乏しさを感じた実習場面, 群馬保健学紀要, 26, 133-140 (2006)
- 22) 岩瀬貴美子: 外来通院中にある思春期小児がん患者の自己効力感の特徴とそれを形成・変化させる生活体験, 小児がん看護, 2, 1-10 (2007)
- 23) ヴァージニア ヘンダーソン: 看護の基本となるもの (改訂版), 日本看護協会出版会, 75, (1973)
- 24) 文部科学省: 小学校学習指導要領解説生活編, 日本文京出版, 9, (2006)
- 25) 國眼真理子: いまどきの若者の考え方・育て方, 日総研出版, 32-62, (2005)